

第一章

エレベーターを降りると、岸野優は持ち場へ戻った。

この時間になると、さすがに社員は残っていない。時刻は八時半だった。今日は会議が長引いた。新しい商品開発についての話が長かったからだ。

新商品のプレゼンには時間がかかり、開発部もそれなりに準備をして、会議に臨むので、どうしても時間がかかってしまう。そのプレゼンに対して、あーだこーだと文句をつける役員も少ない。

今日の会議もそのパターンだった。プレゼンが終わった後で、各部の部長や役員から、質問投げかけられたり、ツッコミを入れられたりする。

商品製造にはコストがかかり、社の経費を持ち出すのだ。もしも失敗したら大きな損失になる。みんなが慎重になるのも無理はなかった。

今日の新商品には優も難色を示した。果たしてその商品が売れるのか？ 大いに疑問だった。商品開発部長の勝野は優の同期であり、仲の良い社員だったので、なんとか企画を通してやりたかったが、まだまだいくつかクリアしなければならない課題が目についた。

勝野に恨みはないが、会社の損失になると、彼にはさらなる責任がのしかかるので、あえて反対意見を言わせてもらった。

人事部の部屋へ入ろうとした時、後ろから声をかけられた。振り向くと、その勝野だった。
「お疲れさん」

お互いに労をねぎらった。

「いやぁ、まいったよ。多少の風当たりは覚悟してたんだけどな、あそこまで突っ込まれるとはな」

「気にすることはないさ。大きな損失にならなくて良かったじゃないか。それに新商品の良さはみんな理解していたんだ。後は課題をクリアするだけだ」

「まあ、そうだな。それにしても今日まで準備を進めてきた部下たちの落胆ぶりを見ると俺も気の毒でな」

勝野はそう言って頭をかいた。

「そこはお前がフォローしてやるしかないさ。部下を守るのも上司の仕事だ」

優はそう言って、勝野の肩をポンと叩いた。

「どうだい、今夜あたり一杯」

勝野が誘った。

「いいねえ、付き合うよ。お前の愚痴をたっぷり聞いてやるよ」

二人で笑ったとき、優の携帯が鳴った。相手は坂崎専務だった。今日の会議で一番強く反対意見を言っていた人だ。優もこの人には一目置いていた。

「面倒な人からかかってきたよ」

勝野にそう言って、優は携帯を耳に当てた。

「お疲れさまです。岸野です。はい——はい——わかりました」

用件だけ聞いて、優は電話を切った。

「すまん、愚痴を聞くのはまた今度だ」

「大変だな、お前も」

勝野はそう言って笑みをこぼした。

電話は坂崎専務からのお誘いだった。今夜、飲みにつき合え、というものだった。

優はこの会社で人事部長を務めている。入社して十一年目に入る。今まで様々な部署を経験していた。営業部では勝野と机を並べていたこともあった。

坂崎専務は入社したばかりの頃の直属の上司で、それ以来、何かと目をかけてもらっている。

その頃は坂崎係長だったが、今では重役に就くところまで上りつめていた。

その坂崎専務からのお誘いだ。断りにくい。「喜んでお供します」という態度を取らなければならない。

今夜は疲れているので家に帰って寝たいところだったが、こんな時に限って誘ってくる。おおかた行きつけのクラブだ。そこにはお気に入りのママさんがいるのだ。

一階のロビーで待っていると、五分遅れで坂崎専務が登場した。優は「お疲れさまです」と一礼をした。坂崎専務は無言で会釈をして、優の肩を叩いて、玄関を指さした。この人は意外とダンディだ。女性社員からも人気がある。

通りに出てタクシーをつかまえた。

「今日は二人だけですか？」

タクシーが走り出したタイミングで優は言った。

「ああ」

「いつもの……？」

「そのつもりだが」

それだけの会話だった。いつもの店ということだ。

「最近可愛い子が入ってね。君にどうかと思ってさ」

「ああ、ありがとうございます」

余計なお世話だった。優は四十歳になろうとしているのに、未だに独り身だ。それを気にしての言葉だろうが、自分の嫁さんぐらい自分で探すつもりだ。坂崎専務のことを尊敬はしているが、そこまで気にされると少し重く感じる。

坂崎専務は確か五十歳だと聞いている。もちろん結婚しているが、子供はいないらしいかった。奥さんも綺麗な人だと聞いたことがあるが、優は見たことがない。

そんなことを考えていると、「実はね」と坂崎専務が言った。

「はい」

「まだ先の話なんだが、沖縄に事業所を置く計画があるんだ」

「そうなんですか。沖縄ですか」

「うん、まだ構想の段階で、詳細は決まっていないんだがね。それが本決まりになれば、そっちへ行く人間を確保しなければならない」

「なるほど」

「また、人事が忙しくなると思う。もちろん私もバックアップするが、君にも目星をつけておいて欲しいと思ってね」

「沖縄に行く人間を、ということですよネ？」

坂崎は頷いた。

「わかりました。この件は……」

坂崎は人差し指を口にあてた。内密にということらしい。まあ、そうだろう。

しかし、驚きだった。

「あの、一つよろしいでしょうか？」

坂崎は何も言わずにこちらを見た。

「沖縄に工場を作るといっていいのでしょうか？」

「それもあるが、店舗を構えるか、商業施設に入るか、今検討中だ」

「いつ頃の話ですか？」

「年明けには動き出す。できれば来年夏ごろには置きたいと考えてる」

あと一年もないじゃないか。ぜんぜん先の話ではない。人選を急がなければならない。

沖縄となると少々厄介だ。場所が遠いだけに、手を挙げる人間はいないと思う。現地が好きな人間ならいいが、そうでなければ「沖縄に飛ばされる」と解釈するだろう。当然それを決めた優は恨まれる。頭の痛い問題だった。

タクシーは雑居ビルの前に着いた。クラブ「美乃里^{みのり}」はそのビルの五階に入っている。この辺りは有名な歓楽街で、多くの店が軒を連ねている。そこら中、看板だらけだ。

優と坂崎はエレベーターに乗り込み、五階に上がった。店に入ると、美人ママの美乃里が出迎えてくれた。すでに連絡済みだったようだ。

優たちは席へ案内された。まだそれほど客は入っていないようで、店内は空いていた。

「どこにしようかしら」

あちらこちらの席が空いているので、美乃里さんは逆に迷っているようだった。

「ママと一緒になら、どこでもいいよ」

坂崎が言った。優たちは目に着いたボックス席に座った。すぐに二人の女の子が来てくれた。どちらも可愛い子だ。胸の谷間が見えるドレスを着ていて、ついついそこに目が行ってしまう。

そして美乃里さんは坂崎専務の隣に座った。なんとなく中に入っていけない雰囲気だった。もしやこの二人は良い仲なのではないだろうかと思えた。

優は二人の女の子の間に座っていた。

「この子が新しく入ったリカちゃんだ」

坂崎が言った。

「リカで一す。よろしくお願いまーす」

そう言って彼女は小さな名刺をくれた。手書きでリカと書かれていた。拙い字だ。

童顔で確かに可愛い子だった。もう一人の女の子も名刺をくれた。こちらはカオリさんといって、リカよりも大人びた感じだった。優はカオリさんの方が好みだった。

坂崎はボトルをキープしてあった。それを美乃里に作ってもらい皆で乾杯した。よくある光景だった。せっかくなので優も可愛い女の子たちとお喋りを楽しもうと思った。

この店は二回目だった。坂崎と飲みに来たのも、これがまだ三回目だ。それほど頻繁に付き合わされているわけではない。

恐らく今日呼ばれたのも沖縄の件を耳に入れるためだろう。それと、たまには二人で羽目を外してコミュニケーションを取ろうということだ。

優はリカのような女の子は少し苦手で、大人の雰囲気を持ったカオリとばかり話してしまった。リカには少し悪いかなど思いながら盛り上がり、あっという間に二時間が過ぎた。

坂崎もだいたいぶ飲んだようで出来上がってしまった。

「岸野くん、君には大いに期待してるんだぞ」

と、べろんべろんに酔っぱらって言ってくれた。

「はいはい、わかりました専務。もう帰りましょう」

美乃里さんはいつものことだという目で坂崎を見ている。店でタクシーを呼んでもらって、優と坂崎はそれに乗り込んだ。

行き先は坂崎の家だ。道順を説明するぐらいの冷静さは失っていなかったもので、優は少し安心した。酔っぱらったら優が介抱するしかないのだ。さっさと坂崎を家に届けて、自分も自宅に帰りたと思っていた。

二十分ほど車で走った。住宅街を通り抜けて、マンション前で坂崎がタクシーを停めた。坂崎の自宅へ来るのは初めてだった。マンションとは意外だった。優はてっきり一戸建ての家に住んでいると思っていたのだ。

支払い坂崎が済ませた。恐らくこれも経費で落とすのだろうと優はチラッとと思った。

「さあ、君も一緒に。飲みなおそう」

優はそのままタクシーに乗って帰ろうと思っていたので「え？」と思ってしまった。時刻は十一時を過ぎている。今から飲みなおしたら日付を跨いでしまう。そして帰りの足もない。

しかし坂崎にそう言われたら、一緒に降りるしかなかった。仕方なくタクシーを見送り、優は千鳥足の坂崎を抱きかかえて、マンションのエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターで七階に着くと、外廊下を歩き、ようやく坂崎の部屋の前で止まった。坂崎はインターホンを押して、奥さんに知らせた。